

ないだろうか。

4-1 ガムランの音/「今ここ」ということ

ガムランの楽器から奏でられる音は鍋や釜をたたいて
いる時のような素朴な音であり、音そのものを感じる。
音は目には見えないが、その音は何かしっかりとした重
さを持っているように感じる。一つ一つ「かたち」を持っ
ているかのようなのである。

これはガムランが何かをたたいて音を発し、「今ここ」
を相手に示していた、という造形的な装飾と同じような
起源をもっているからではないだろうか。

またガムランの楽器、グンデルやサロンといった鍵盤
打楽器の奏法の一つに次の音を出すときに前の音の鍵盤
をおさえ音が混ざらないように響きをとめて、音を独立
させることがある。

合奏として発展しその音が増えていくと、一つ一つの
音または形を有する「かたち」を少しずつしながら被せ
ていくように感じる。ガムランを聴いていると、それが
同時多発的に様々な場所で発生し、音同士を被せつつ積
み上げているかのような情景が浮かぶ。

4-2 番いのリズム/構造と装飾

4-1 で述べたようにガムランの音の原点は「ここにい
る」という自分の居場所を示すために音を発する、という
本来の意味においての装飾だと考えられるが、合奏し音
が増えていくことで主旋律が生まれ、主旋律と装飾とい
う主と従の関係に分かれていく。しかしそのどちらが欠
けてもガムランにはならないため、装飾と構造が不可分
な状態であるといえる。

一方造形、その中でも建築について考えると、古典と
いわれる建築も構造や構法と装飾が不可分で有機的な状
態で構成されていた。そういった構造と装飾が不可分な
状態であるものは原初的な建築に見られる特徴であり、
根源的な感覚をもたらすのではないだろうか。

5. 設計提案

東京都品川区東五反田の在東京インドネシア共和国大
使館は現在建替工事をしている。その敷地に、大使館と
しての機能に加えてインドネシアの文化振興のための施
設を提案する。インドネシアと日本の2つの国の文化的背
景を持つ大使館という特殊な場所で、それらの国のもつ
文化的背景を超えて繋がり合う根源的感覚・記憶を呼び
起こすことのできる建築空間の提案を行う。

6. 全体構成

6-1 周期性

ガムランに見られる、経典や曼荼羅
のように同じものを反復する特徴を、
建築に落とし込む。二つに分かれた機
能のうち、文化施設に立体的な回遊性
を持たせる。

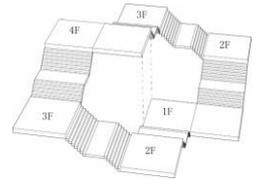


図3 周期ダイアグラム

6-2 偶発性

ガムランの楽器が調律されていない
からこそ起きる偶然できる音のずれや
響きの偶然性・偶発性は聴覚的モアレ
のような現象であり、ガムラン特有の
浮遊感を生み出す。このような体験を
柱をさまざまな規則で並べ重ね合わせ
ることでズレを起こす。

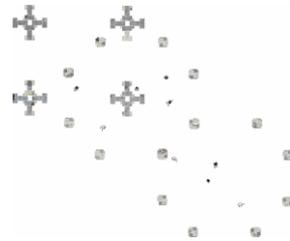


図4 柱の位置のずれ

7. ディテール -構造と装飾性-

ガムランの番いリズム構造を用いた柱や階段を考え
る。PC 鋼棒を番いリズムに沿って積み上げたジャワスト
ーンに打ち込む。そうすることで構造体である鋼棒と一
体化される。また空間体験として反転が起こる体験を階
段の並べ方と踊り場の存在によって実現する。この工夫
によりガムラン的空間を実現することができる。

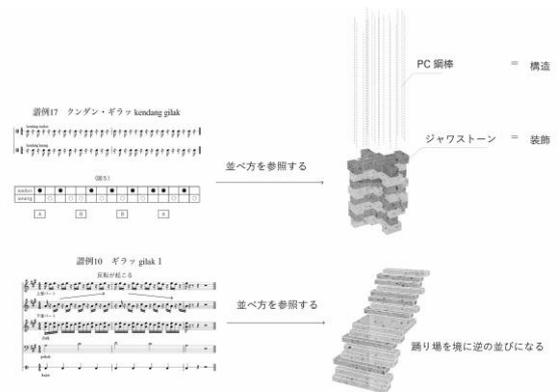


図5 参考にしたガムランの楽譜⁽²⁾と柱・階段の例

[主要参考文献]

- ・皆川厚一：「音楽指導ハンドブック 20 ガムランを楽しもう 音の宝島バリの音楽」、音楽之友社、1998年。
- ・(1) <https://ameblo.jp/kaqq/entry-12185814230.html>, 2023年1月14日閲覧
- ・(2) 皆川厚一：「インドネシア、バリ島のガムランにおける位相性の考察」、神田外語大学紀要, 2021年, 第33号, 67-81p.
- ・(3) 山崎正和：「装飾とデザイン」、中央公論新社、2007年。
- ・明石信道、村井修：「フランク・ロイド・ライトの帝国ホテル」、建築資料研究社、2004年。